

基礎的造形技法の指導に関する一考察

加藤 克俊* 樋口 一成**

*非常勤講師

**美術教育講座 (工芸)

A Study of The Guidance on Basic Techniques of Art

Katsutoshi KATO* and Kazunari HIGUCHI**

**Part-time Lecturer of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

***Department of Fine Arts Education (craft), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

はじめに

大学生や短期大学生にもものづくりの経験が不足していることが指摘され始めて久しいが、現在でも、実際に授業等の中で大学生や短期大学生がものづくりを行う光景を見ていると、彼らの多くにもものづくりの経験が不足していることは明確であり、改善される方向に進んでいるとは言い難い現状が続いている。

彼らがものづくりを行っている様子を見ていると、例えば、紙を用いて工作を行なっているときに紙の厚みや強度を考慮しなくてはならない場合にそれらを見逃して制作を進めていたり、前もって制作の順序を考えた上で制作を進めていかなければならない場面にその順序を考慮しないで制作を進めてしまったり、途中で紙を剥がして制作をやり直したりする光景を見掛けることが多い。さらに、ハサミやカッターナイフといった道具を使う場合にそれらの道具を上手に使用できずにとっても使い辛そうに制作している光景を見掛けることも多い。

本稿の筆者である加藤と樋口は、これまで大学や短期大学において教員養成や保育士養成に携わってきた。そこで表現・図画工作・美術の実技指導を行う中で大学生や短期大学生が効率よくものづくりの技術やコツを学ぶことができるように、その指導方法や指導内容を工夫・改善しながら現在に至っている。本稿は、その授業の内容と大学生や短期大学生の変化との関係を分析することによって、基礎的な造形技法の指導に関して適切な指導方法や指導内容を探ろうとするものである。将来、幼稚園・保育所・小学校・中学校等において子どもたちを指導する立場になる彼らが、そのときに、子どもたちに必要な技術やコツをしっかりと伝えることができ、それによって子どもたちの制作意欲を引き出すことができるように、その指導方法や指導内容について考察したい。

加藤は2005年から、樋口は1990年から授業の中で、大学生や短期大学生に、平面技法やペーパークラフトの指導を行なっている。本稿では、加藤が愛知学泉短期大学・名古屋短期大学で、樋口が愛知教育大学・長崎大学・愛知学泉短期大学で指導した内容とそれぞれの学生たちのものづくりの様子やその変化との関係を分析し考察していきたい。

実践 I

筆者(加藤)は2005年から、愛知学泉短期大学にて樋口とともに「美術 I」「美術 IV」という授業を担当することとなった。このとき、3クラスのうち2クラスを樋口が、残りの1クラスを加藤が担当した。その2年後には、3クラス全てを加藤が引き継ぎ、現在に至っている。

授業の進め方は、加藤と樋口があらかじめ打ち合わせをし、基本的には同じ内容や進め方を取った。平面技法に関する授業では毎回3つの技法を学ぶことにした。毎回、授業の最初に学生を教室の前に集め、どのように一つ一つの技法を用いて制作するのかを教員が実際に制作しながら説明をした後、学生たちは自分の席に戻って制作をするかたちで授業を進めた。制作する段階では、学生たちはまず八つ切り画用紙を半分に折り、基本的には向かって左側に「技法名」、「材料」、「つくり方」、「注意点」をまとめ、右側には、その技法を使って制作をし、日付を入れてその技法に関する部分を完成とした。実際には制作をやり直す場合や授業時間内に作品が完成しない場合、学生たちは家で制作することもあった。

授業の中で取り扱った技法は、大きく二つに分けることができる。その一つは平面技法であり、いわゆる「フィンガーペインティング」「デカルコマニー」「ステンシル」など描画や版画に用いる技法で、初期の段階

でこれらを学ぶようにした。次には、「紙を使った動く仕組み」「ポップアップカード」などペーパークラフトに用いる技法を学ぶようにした。このどちらもそれぞれ半期間に学ぶことができるように内容を厳選し、半期の授業の最後には、それぞれを1冊の技法集としてまとめて提出するように指導した。

加藤は2005年より愛知学泉短期大学では「美術Ⅰ」「美術Ⅳ」(2010年度1年生からはカリキュラム変更に伴い「造形Ⅰ」のみ)、2008年より愛知学泉大学では「図画工作B」「図画工作C」、2010年より名古屋短期大学では「図画工作(平面)」にて、平面技法やペーパークラフトの内容を扱う授業を行なっている。「美術Ⅰ」「図画工作B」では平面技法、「美術Ⅳ」「図画工作C」ではペーパークラフト、「造形Ⅰ」「図画工作(平面)」では半分を平面技法、半分をペーパークラフトというようにそれぞれ全15回の授業を行っている。それぞれの大学で受講する学生の取り組み方や制作する状況に違いがあることから、それぞれに応じた授業を行なっている。

授業を重ねていく中で加藤は、学生たちがあとから自分のつくったものを見返した時に、当時自分が制作していた時の様子がよくわかるように作品づくりをしていってほしいと考えるようになった。そのため、左側のまとめ欄をより重視して欲しいと考えて、学生たちには、6:4で右側(作品を制作する部分)よりも左側(技法や制作して気付いたことをまとめる部分)の方が大事であると指導するように変えていった。

学生たちは図工や美術が得意な者ばかりではなく、どちらかという苦手意識を持っている学生の方が多い場合もあった。このような状況で授業を行うにあたっては、作品制作の際の技術や完成した作品の善し悪しで授業の評価を行うよりも、将来の教育者や保育者としてどのように課題に取り組み、考えることができたかを評価していく方に意味があると考えようになっていった。左側の制作を振り返ってまとめる部分の方が学生たちの個々の器用さや基礎的な技術にあまり起因せず、気を配りながら制作に取り組めた学生ほど丁寧に書き込むことができると考えた。また、行ったことを振り返り、資料としてまとめるという作業は、将来社会人となりさまざまな場面で必要とされる能力であると考えた。実際には、より詳しく制作を振り返るよう見出しを作って、自発的に考えを巡らすことができるような仕掛けを考えた。大きく変えたのは「注意点」としてまとめていた部分である。加藤はそれを「ポイント」に変更し、以下に挙げる3つの視点を示した。

1. 「気付いたこと」: 右側の作品制作を行った中で、気付いたことがあれば書くように指導した。
2. 「子どもたちに気を付けること」: この技法を子どもたちと一緒に制作する場合に、どのような点に

において配慮が必要なのか書くように指導した。

3. 「次に上手に制作するために」: 基本的にはどの技法も学生たちは初めて用いる場合が多く、一回の制作で思い通りに仕上がらない場合が多かったことから、次に自分が同じ技法を用いて制作するときのことを考えて、どのような点に気を付けるべきかを、失敗した点などと共に改善策を書くように指導した。

以上は主に平面技法のまとめにおいて採用した視点であるが、ペーパークラフトにおいては、材料が紙ばかりということで技法が変わってもそれぞれの制作の「ポイント」に違いが見つけにくいということもあり、どんな作品に応用できるかなどを考えさせた。

3つのポイントのうち、「1. 気付いたこと」では、それぞれの学生が独自に発見したことや学んだことを書きこむ欄であるといえる。または、指導者の説明の中から拾った言葉を、実際に制作してみてどうだったのかを検証する欄であるといえる。この「1. 気付いたこと」に学生がまとめた内容を以下に記す。

・2011年度「造形Ⅰ」吹きながし 学生A

「真上から吹くと色々な方向にのびてくれる。」

このコメントは手順を説明するときに、加藤が簡単に紹介した技法をAが聞き拾い、実践したものである。

・2011年度「造形Ⅰ」合わせ絵 学生B

「水をたくさん入れると絵の具がうすくなり、うまく移し取れない。」

これは、Bが制作の中で大事なポイントとして、発見したことである。学生たちは初めのうち絵の具を出すのがもったいないと思う傾向があり、いつも水が多めになってしまっていた。この問題点を学生Bは自ら気付いたといえる。

次に「2. 子どもたちに気を付けること」では、教育者や保育者となる学生たちにとって、最も配慮が必要な項目であるといえる。特に平面技法を学ぶ学生は、全て1年生であり、自分が教える立場になったことや子どもたちの真の姿を十分に想像できない状況である。しかし、将来子どもたちに指導するということを意識させることは、学生たちが教育者や保育者となるための重要なステップになると考え、この点を大切なポイントに設定した。

・2011年度「造形Ⅰ」ひっかき絵 学生C

「削ったクレヨンのカスは床に落とさないように指示する。」

クレヨンを扱う制作では、学生においてもそのカスによって思わぬところを汚してしまうもの。子どもがクレヨンを扱う際にどんな行動が考えられるか、床にクレヨンのカスが落ちればそれを踏んで汚れが広がってしまう。Cは子どもたちの行動に想像を巡らせて書くことができている。

・2011年度「造形I」しわしわ版画 学生D
「ローラーが少し重たいと思うので、下に落とさないように注意する。」

この授業を行ったのは6回目の授業で、毎回の流れもわかり、子どもたちに教えるというシミュレーションにも慣れてきたころであった。確かに授業で使ったローラーは、子どもにはやや大きく扱いにくいサイズであった。Dはそういった子どもたちの身体的特徴も考慮した制作のまとめが、自然とできるようになっていた。

最後に「3. 次に上手に制作するために」では、自分の制作を振り返り、思い通りにいかなかった点を挙げ、どうしたらよかったのかを考えることで、その技法をより自分たちのものとさせるように考えた。また、まとめられた作品群はそのまま後の自分のための参考資料にもなるので、自分が何につまずいたのかを記すことは大変意味があると考えた。初めて行う技法において失敗したことは、子どもにとっても失敗しやすいところであるといえる。そうした失敗やつまずきは将来、教育者や保育者となる学生たちにとって、忘れてはいけない経験であると考え、これを3つ目のポイントに上げることにした。この点では、学生たちは次のようなまとめをした。

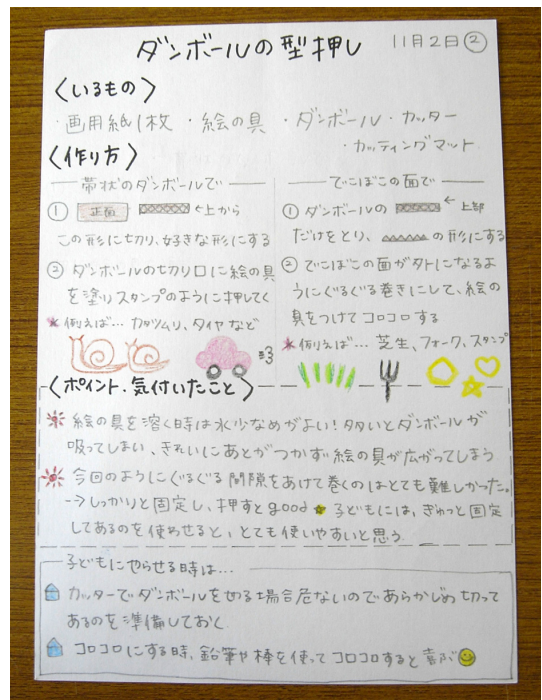
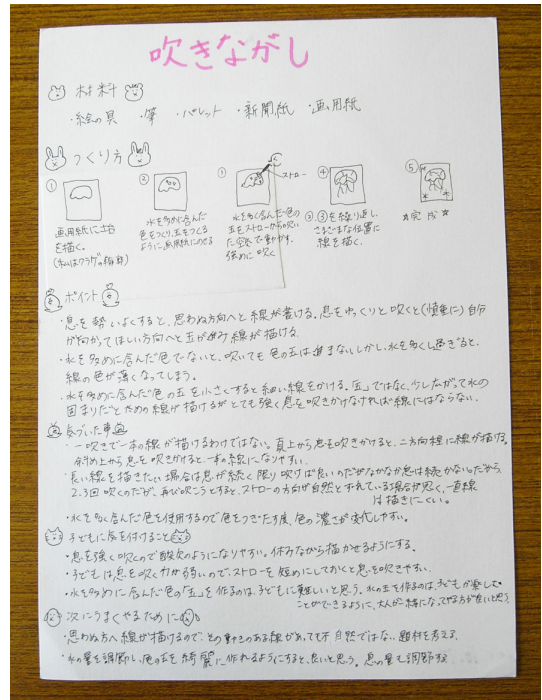
・2011年度「造形I」墨ながし 学生E
「画用紙の両端を持って、たわませた(画用紙の)真ん中から水面に浸す。」

これは水面の墨汁を画用紙に移し取るときに、空気が入らないようにするやり方である。手順の多いこの技法において、Eはつついあわてて画用紙を水面にそのまま置いてしまった。作品にできてしまった白い部分は、入り込んでしまった空気の跡であることを示している。以上が、学生たちのまとめた例である。

2010年度より、加藤は名古屋短期大学でも授業を受け持つこととなった。その年の後期の授業「図画工作(平面)」においては、八つ切り画用紙を半分に切り、表に制作のまとめ、裏に制作をして、カード形式とすることとした。そして最終的にはボックスをつくって収納させるようにした。愛知学泉短期大学「美術I」「美術II」「造形I」では本にするため八つ切り画用紙の裏は使っていないので、この方法では使う紙の量も半分程度となった。

以下(図1・2)は、ボックスの形を取った名古屋短期大学の授業での2人のまとめの1部である。画用紙の中にぎっしりと書き込みがしてあり、しかも彼らはほかの技法においても、このフォーマットで書きこんでいるため、内容的にもまとめた分量的にも十分な資料といえる。

このように書き込まれた制作のまとめは、名古屋短期大学の授業でのみ見ることができた。その要因としてまとめ方が深く関与しているのではないかと考えられ



(図1・2) 名古屋短期大学での学生の制作のまとめより

る。八つ切り画用紙を半分に折ってその半分ずつに作品制作とまとめを行う方法と、八つ切り画用紙を半分に切ってその両面にそれぞれ作品制作とまとめを行う方法との違いが、まとめの内容やまとめ方の違いに影響が出ているように推察できる。今後は、この点についても検証を行なっていきたいと考えている。

実践Ⅱ

筆者(樋口)は、1992年に共著出版した『幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)と2008年に共著出版した『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』(愛知教育大学出版会)を授業の教科書や参考書に用いて、これまで愛知教育大学・長崎大学・愛知学泉短期大学等で、平面技法やペーパークラフトの実技指導を行ってきた。以下にその指導の際に重視した点と学生たちの様子をまとめる。

筆者が指導する際に重視した点は、次のようなものである。

- ①造形表現の基礎を容易に幅広く学ぶことができるような内容の厳選
- ②ものづくりの技術の習得をより確実なものにするような内容と習得する技術の順序
- ③ものづくりにおけるコツの獲得を目指した内容の厳選
- ④指導者として必要なものづくりの経験とそのまとめ方
まず①造形表現の基礎を容易に幅広く学ぶことができるような内容の厳選という点についてであるが、これは限られた時間の中で、幅広い造形要素を効率よく学ぶことができることを第一に考えた。先に記した著書の中には、平面技法60種類、ペーパークラフトに関する技法31種類がまとめられているが、筆者はこの中から基本となる平面技法20種類、ペーパークラフトとして動くペーパークラフトの技法4種類とポップアップカードの技法12種類を選んで指導を行なっている。この技法の数については、授業時数の削減によって過去と比べて現在は減少せざるを得なくなっている。これらの技術の領域については、絵画的なもの(図3)・版画的なもの(図4)・工作的なもの(図5)など、技術に限られた領域だけに集中せず、できるだけ多種多様な技術を学ぶことができるように配慮している。これらの技法を用いた作品づくりとそれらをまとめた製本づくりを約半年を掛けて学ぶことができるようにしている。現在指導している技法は次の通りである。

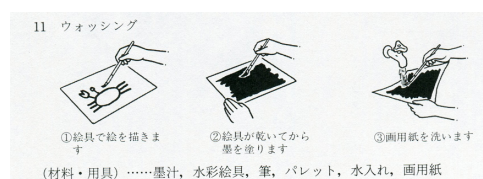
平面技法－手型足型とり・合わせ絵(デカルコマニー)・吹きながし(ブロウイング)・たらし絵(ドリッピング)・霧ふりかけ(フロスト)・スポンジ画・はじき絵(パチック)・にじみ絵・シャボン玉うつし・アワうつし・のり版画・紙版画・ひも版画・しわしわ版画・転写刷・糸ころがし・糸引き絵・ウォッシング・ステンシル・サインペンの水描き。(技法名は、『幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)を参照)

ペーパークラフト－(動くペーパークラフトの技法)テープの伸縮・テープの活性化・テープの動揺・テープの動変換・アニマルフェイス。(ポップアップカードの技法)とび出しカード・バクバクカード・山々カー

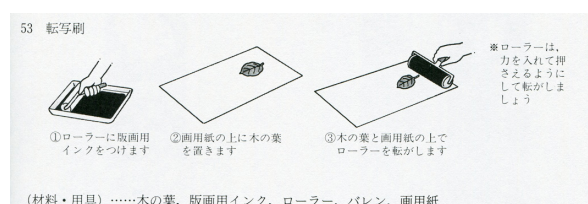
ド・ガォ～カード・テーブルカード・かくれんぼカード・2本足カード・穴のぞきカード・ひっぱりカード・テレビカード・バタバタカード・立つ家カード。

(技法名は、『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』(愛知教育大学出版会)を参照)

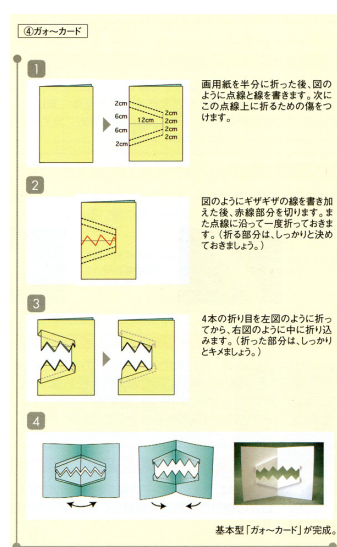
ものづくりの経験が乏しい大学生や短期大学生でも楽しみながら基本的な技術の習得ができるように幅広い領域から比較的容易に制作できる技術を選んで指導を行っており、授業の中で学んだ技法や制作した作品を1冊の技法集としてまとめるように指導している。特にまとめる際には、将来、保育士や教員になった際



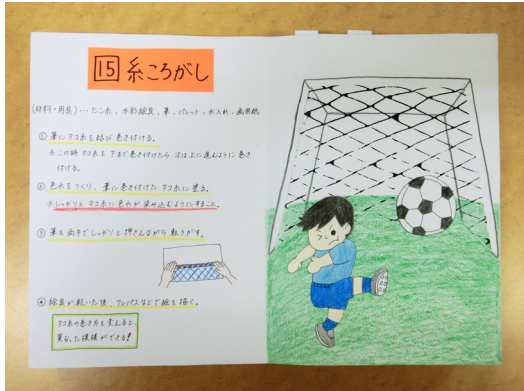
(図3) 絵画的な技法の例「ウォッシング」—『幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)より引用



(図4) 版画的な技法の例「転写刷」—『幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)より引用



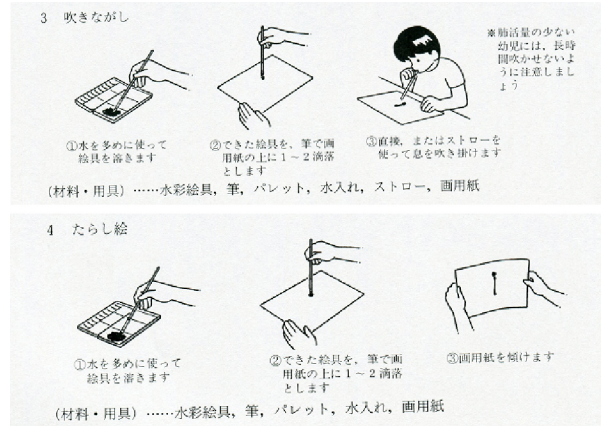
(図5) 工作的な技法の例「ガォ～カード」—『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』(愛知教育大学出版会)より引用



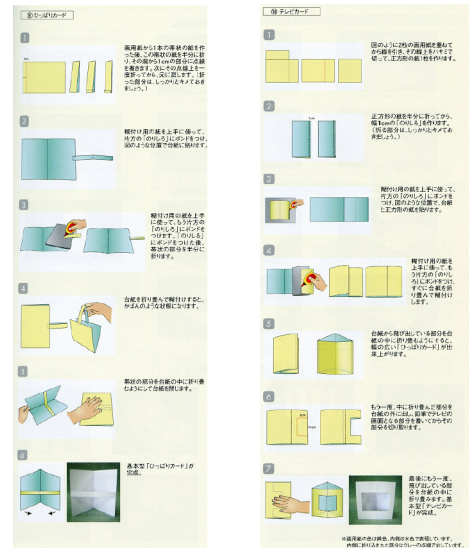
(図6・7) 平面技法やペーパークラフトの技法をまとめた技法集とその中身(参考ページ)

にその技法集を見て、過去に経験したものづくりの内容を自分自身で思い出すことができるまとめ方をするように指導している。これによって、授業開始時に美術や図画工作が苦手と嫌いと答える彼らの多くが、毎回、授業終了時には美術や図画工作が楽しくて好きになったと答えるように変わってきている。彼らは、授業時に制作した技法集(図6・7)を、教育実習の際に活用したり、また保育士や教員になった際に活用したりしている。

次に②ものづくりの技術をより深く習得できるような内容と習得する技術の順序という点についてであるが、まず習得する技術の幾つかは技術的に近いものを同じ時間に学ぶことができるように考えている。これは似た技術を学ぶことによって一つの技術を何度も繰り返して経験して技術をより確実に習得できるように考えたものである。例えば、平面技法の「吹きながし」と「たらし絵」(図8)では絵の具に加える水の量が理解できるように、またポップアップカードの「ひっぱりカード」と「テレビカード」(図9)では作品の端から端まで紙が引っ張られる構造を確実に理解できるようにその内容と順序を考えて指導を行なっている。さらに技術を確実に習得するための工夫として、技術の似たものづくりがある場合は、容易な技術から難易度の高い技術へと進んでいくことができるような指導の順序にも考慮している。



(図8) 「吹きながし」と「たらし絵」の技法—『幼稚園・保育所の保育内容—理論と実践—保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)より引用



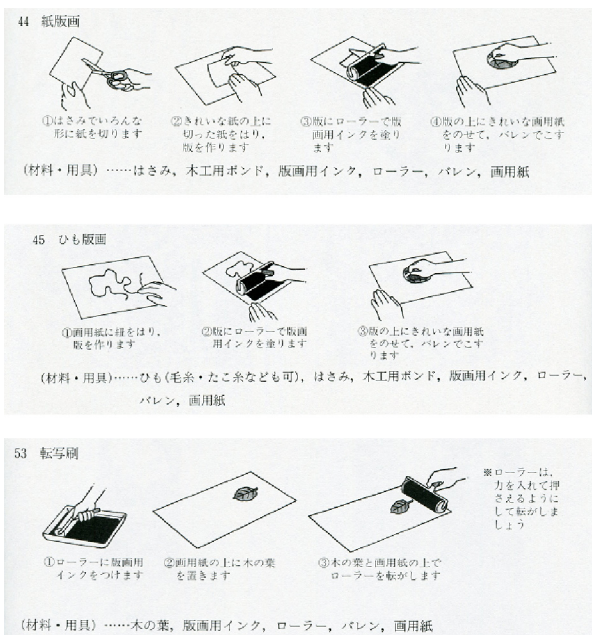
(図9) 「ひっぱりカード」と「テレビカード」—『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』(愛知教育大学出版会)より引用

ものづくりの技術に関する指導では、言葉では何度繰り返しても十分に伝わらない面があるが、繰り返し制作できるような環境を作ることで、自然に技術やコツを理解できるようになる場合がある。作品を制作した学生に、彼らが制作した作品を見ながら具体的に制作面での技術の工夫やコツを伝え、再度制作することを促すことで、彼らはものづくりの技術やコツをしっかりと自分のものにするができるようになる。この点でも、比較的容易な技法を使ったものづくりを授業で取り上げているメリットがここにある。

続いて③ものづくりにおけるコツの獲得を目指した内容の厳選という点についてであるが、この点については2つの方法を採用している。一つは、できるだけ何度も繰り返してもものづくりを経験できるように考慮していること、そしてもう一つは技術を説明する段階で

コツを前もって紹介するようにしていることである。一つ目のものづくりを何度も繰り返し経験できるようにしている点では、例えば版画の版と作品の関係を理解できるように、短時間で版を作ることができる「のり版画」「ひも版画」「紙版画」「しわしわ版画」「転写刷」(図10) という5つの版画を体験できるようにしている。短時間で版と作品の関係を理解することによって、版を制作する際に作品がきれいにできるコツも獲得することができる。またさらに何度もローラーでインクをのせて作品を刷る中で、インクの量や刷る際の加減が自然に理解できるようになる。二つ目の技術を説明する段階でコツを紹介するという点については、例えば、ペーパークラフトの指導段階で、紙を折る際に道具を使って紙に傷を付けてから折ることや紙と紙を接着する際の糊の量など(図11)について、実際に筆者が実際に制作する中で、ものづくりの過程を見せながらコツを紹介するようにしている。このようにものづくりのコツを理解し、制作に上手に活かすことができると、作品制作の際に作品が汚れずにきれいに出来上がったり、制作時間が短縮できたりすることが彼らの制作の様子からよくわかる。

最後の④指導者として必要なものづくりの経験とそのまとめ方という点については、授業の中で経験したものづくりを作品とともに文章等でまとめるように指導している。このとき、特に自ら経験した際に上手いかなかった場面やそれをどのようにクリアしたか、参考写真(図12)の中に書かれている「もう片方の手でしっかりと押さえる」「型を生かして作品を作ると

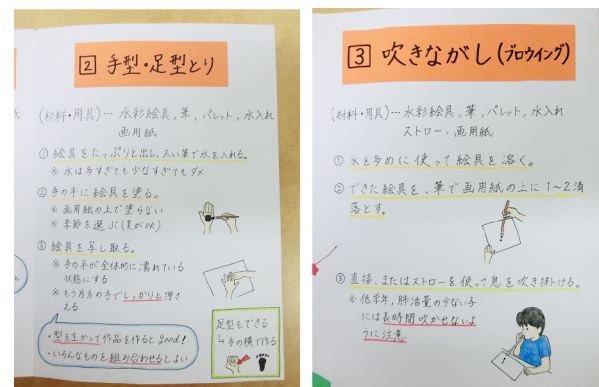


(図10) 「のり版画」「ひも版画」「紙版画」「しわしわ版画」「転写刷」の中より「ひも版画」「紙版画」「転写刷」『幼稚園・保育所の保育内容—理論と実践—保育「表現」Ⅱ(造形)』(田研出版株式会社)より引用

good!』のように、具体的に記録するように指導している。また、大人が容易に制作できることであっても小さな子どもたちにとっては難しい場面があるが、この場面を想像して記録するとともに、小さな子どもたちが制作する際にどのような助言すればよいかといった点やどのように環境を整えればよいかといった点について、参考写真(図13)の中に書かれている「低学年、肺活量の少ない子には長時間吹かせないように注意」のように、記録するように指導している。ものづくりの内容をまとめる中では、自らの制作を振り返るだけでなく、子どもたちを指導する際に必要な内容を想像しながらまとめることは、将来、保育士や教員となる彼らにとっては、ものづくりを経験することと同じく



(図11) 紙を折る際に道具を使って紙に傷を付けてから折ることや紙と紙を接着する際の糊の量などについて—『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』(愛知教育大学出版会)より引用



(図12・13) ものづくりを自ら経験した際に大切である内容を記録した部分と子どもたちにもものづくりを指導する際に必要であると思われる内容を記録した学生の教材集より

らい重要なことである。これらの記録は、ものづくりの経験を積んでいく中で、また子どもたちにもものづくりを指導していく中で、さらに気付いた必要な点を書き込んでいくことが大切である。授業の中では、制作した教材集に将来気付いた点も書き加えていくように助言・指導している。

まとめ

これまで加藤と樋口が、基礎的造形技法の指導の際に取り組んできた指導内容、重視したポイントやそれに伴う学生たちの反応についてまとめてきた。これによると、加藤の指導実践では、制作面での取り組みよりも制作を経験した上でのまとめや振り返りを重視していることがわかる。それらの中で学生たちが将来子どもたちに伝えるべき内容をしっかりと押さえることが重要であると考えて授業を行ってきた。この視点によって、学生たちの中で制作面でのより深い気付きがあったり、造形を指導する場合に自らの経験を活かすことができるようになったりという変化が生まれていた。一方、樋口の指導実践では、制作面での経験を少しでも多く効率的に学べるような工夫、さらには技術だけでなく造形活動を行う際に必要なコツまでも獲得できるような工夫を行なっていることがわかった。さらにそれらの経験が将来教育者や保育者となる学生たちにとって有効に働くような制作のまとめを行うように指導していることがわかった。この視点によって、学生たちの中では、制作が苦手であった気持ちから開放されたり、作品づくりを楽しんでできるようになったりという変化とともに、指導者として造形を指導する場合に精神面や技術面で自らの経験を活かすことができるようになる変化も見られた。

加藤、樋口とともに、今回の結果を活かしながら、今後もさらに基礎的造形技法の指導についてより効果的な指導方法を探るべく、さらに検証を行なっていきたいと考えている。

引用文献・参考文献

- ・『幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－保育「表現」Ⅱ（造形）』（田研出版株式会社）1992発行
- ・『素材>学年>時間>動詞で検索する造形教材』（愛知教育大学出版会）2008発行
- ・竹内博『美術教育を学ぶ人のために』（世界思想社）1995発行
- ・久保田競『脳力を手で伸ばす』（紀伊國屋書店）1983発行
- ・佐伯胖『考えることの教育』（国土社）1990発行
- ・『学ぶ、教える、かかわる 自己教育力をはぐくむ教育行動の心理学』（北大路書房）1995発行

（2011年9月15日受理）